

■ 論 文 ■

先祖との絆を創りだす －日本における先祖調査の展開－

山 口 覚
(関西学院大学文学部教授)

喜 多 祐 子
(華頂短期大学非常勤講師)

■ 要 旨 ■ 専門家の系図学(genealogy)とともに、一般の人々による先祖調査(popular genealogy)が世界中で実施されている。欧米諸国では先祖調査ブームと言い得る状況が長期的に見受けられ、アレックス・ヘイリーの『ルーツ』(1976年)はその象徴となる。日本でも先祖調査の「静かなブーム」が確認されるが、先祖調査の展開について整理されたことはこれまでほとんどなかった。本稿の課題は日本における先祖調査の展開を整理することにある。日本では『ルーツ』とはほとんど無関係に、1970年代には先祖調査ブームが生じていた。2000年代以降でも関連する様々な動きが見出される。先祖調査はいわゆる家意識と結びつく面もあるが、実際にははるかに多様な実践となっている。たとえば、近親者を中心としたパーソナルな家族史(family history)への志向があり、他方ではテクノロジーの進化や情報整理の進展によって巨大な家系図の作成も可能となりつつある。先祖の故地や自身の苗字と同じ地名をめぐる先祖ツーリズムも珍しくない。先祖調査は趣味としての側面を強めているのである。

■ キーワード ■ 先祖調査、系図学、家族史、先祖ツーリズム、ルーツ

1. はじめに

本稿は日本における先祖調査(系図学、genealogy)に関する覚え書きである。ここで言う先祖調査とは名家の家系を主たる対象とした専門家の研究ではなく、一般の人々が個人的な関心において先祖を確認していく様々な取り組み(popular genealogy)を意味する。専門家と一般の人々の実践には明確な区分はないものの、本稿での力点は主に後者にある。ここではまた、父母や祖父母といった近親者個々人の姿を詳細を描いていく家族史(family history)を含めて話を進める。

先祖調査は世界各地でなされている。東アジアでは広く「族譜」の作成が確認されるし(吉原他編2000)、欧米諸国では一般の人々が趣味としておこなう先祖調査が長らくブームといえる状況にある。日本においても先祖調査は長い歴史を持ち、数度の「静かなブーム」もみられる。

欧米における先祖調査ブームとは簡単には次のようなものである。もっとも顕著に見受けられる

のは新大陸へ移住した人々の子孫（ディアスポラ）が先祖の故国・故地を訪れ、先祖調査をおこなうという「先祖ツーリズム（roots/ancestral tourism）」である¹⁾。たとえばスコットランド系ディアスポラによる故地スコットランドへの先祖ツーリズムは19世紀末から20世紀初頭に起源を持ち（Buelmann 2012）、第二次大戦後に大規模化した。アメリカ合衆国では戦時におけるヨーロッパなどへの派兵やエスニック・リバイバルなどを通じて先祖や故地への関心が高まり、先祖調査や先祖ツーリズムが一般化したのである。1976年におけるアレックス・ヘイリーの『ルーツ』の出版およびテレビドラマ化は先祖調査ブームを世界的に強化するものであった。同書は「エスニック系図学（ethnic genealogy）」という分野を派生させることでエスニック・マイノリティに先祖調査の手がかりを与え（山口 2013）、日本でも先祖調査者を増やす1つの契機となった。

欧米では2000年代以降でも先祖調査ブームが続いており、人類学や地理学、歴史学において関連研究が増えつつある（Basu 2007 など）。たとえば Newland（2011）は先祖ツーリズムを含むより広範な「ディアスポラ・ツーリズム」という概念を使いつつ、それが故国のツーリズム産業にいかに関与するかを説いている²⁾。スコットランドでは2009年に「Homecoming Scotland」というディアスポラ向けの大規模な通年イベントがおこなわれ、2014年に再度計画されている。また、2000年代にはイギリスのBBCが『Who do you think you are?』（Waddell 2004）を、アメリカ合衆国のPBS（公共放送協会）が『African American Lives』（Gates 2009）などの先祖調査関連のテレビ番組を放映し、それぞれ高い人気を呼んでいる。

日本でも「静かなブーム」と言い得る現象が過去に何度か起きている。ブームの時期を確定することは困難であるものの、おそらく1970年代から80年代（日本系譜出版会編 1982 など）、そして1990年代後半以降（平岡 1999；丹羽・鈴木 2006：3）がその時期に当たるものと思われる³⁾。実際に一般向けの先祖調査に関するテキストは1970年代以降に増え、2000年代以降ではますます増加する傾向にある。NHKは『ファミリーヒストリー』という番組を2008年から継続的に放送している（NHK「ファミリーヒストリー」制作班編 2011）。

日本において先祖ないし先祖調査について考える場合には「家」ないし家意識との関係は無視できない。その点は以下で改めて触れるが、昨今では「ファミリー・アイデンティティ」（上野 1994）の揺らぎが明らかとなっており、先祖調査もそれと無縁ではないはずである。すなわち、一方では家意識が揺らいでいればこそそれを再確立するために先祖調査がなされ、他方では家意識を前提としない先祖調査もなされているかもしれない。日本における先祖調査について概観した研究は管見では見当たらないため、少なくともその一端を整理することが本稿の課題となる。

1) より政治性の強いものとしてはシオニズムやパンアフリカ主義などによる「帰還運動」が挙げられよう（たとえばコーエン 2012：318）。

2) Newland（2011）によれば、ディアスポラ・ツーリストは国外・国内ツーリストの中間的存在であり、国内ツーリストが利用するようなローカルな施設をそのまま流用できる。また観光シーズンに関係なく周年で、一般的な観光地だけでなく各地に点在するそれぞれの故地を訪れるため、故国全域でツーリズム産業を成長させられる、という。

3) たとえば丸山（2009）は、30年ほど前にも「家系図ブーム」があり、当時には「ご先祖探しのノウハウ本」が多数出版され「家系図についての雑誌まで長く発行されてい」たと記している（44）。

2. 日本における先祖調査と系図学的想像力

先祖調査に関しては、たとえば、なぜ先祖調査がおこなわれるのか、無数にいるはずの先祖のうち誰を調査対象とするのか、先祖調査においていかなる方法を用いることができるのか、といったことが問われるであろう。そしてこれらの問いには相互に関連する部分がある。

先祖調査は、自身や家族のアイデンティティをめぐる何らかの問いかけによって始められることが多いように思われる。もしそうだとすれば、アイデンティティの強化が叫ばれたり揺らいだりする時期には先祖調査をおこなう人々が増加するであろう。さらにアイデンティティをめぐる問いかけに関しては、どの範囲の先祖を対象とすればその問いを満足させられるのかという問題にも結びつく。調査で取り上げるべき先祖は直系だけか傍系を含むのか。家系なのか血系（太田 1967: 24）なのか。家系に含まれる英雄を知りたいのか、「普通」の先祖たちが重要なのか。家意識やエスニシティをめぐる内向きのアイデンティティの強化を目指すのか、それとも数多くの多様な先祖や故地を確認し、それによってもたらされるであろうアイデンティティの相対化を許容するのか⁴⁾。家系の調査に際して「家」の始祖を起点とするのか、それとも調査者自身を起点とするのか。こうした様々な先祖観や家意識の総称を、Nash (2008) にならって「系図学的想像力 (genealogical imagination)」(66) と呼んでおこう。Nash はまた、先祖調査には「伝統的・保守的」なものと「ラディカル・先進的」なものがあると記している (106)。簡単に言えば、前者はアイデンティティの固定化に、後者はその解放に結びつく。

日本においても、先祖は家意識と結びつきながらも可変性を持ち、子孫たちの戦略に応じて操作・選択が可能な対象であったとする議論もある（矢野 2006: 11）。

さて、このように様々な系図学的想像力が生起するとして、多様な想像力に応じられるだけの調査手法があるか否かが次の問題となる。特に記録がほとんど残されていないはずの「普通」の先祖を調査する際には資料的制約がつきまとう。欧米では先祖ツーリズムが産業化され、故国の政府や観光業界は先祖調査の利便性を考慮しつつある。こうした調査手法の強化は「普通」の先祖をめぐる情報を得やすくし、先祖調査ブームに貢献している（喜多・山口 2008）。さらに 21 世紀の今日ではインターネットを介したグローバルな先祖調査結果の共有データベースによって巨大な家系図を創り出すことも可能となり、先祖調査での DNA プロファイリングもパッケージ化された商品となっている（たとえば Kennett 2011）。

日本では、先祖調査に関する諸情報の整理やデータベース化は、後述する武士の家系に関するものを除けば必ずしも進展していない。系図学的想像力は調査手法によって規定される部分が小さくない。そのため、日本では、系図学的想像力が「家」を越えて広がらないとか、せいぜい数世代前までの先祖までしか認識できないというケースも珍しくないであろう。家系に海外移民が含まれるケースを除けば、国境を越えて展開するグローバルな家系が想像されることも考えにくい。

もっとも、日本においても自身や家族をめぐるアイデンティティの在り方は変容しており、先祖調査の手法も強化・洗練されてきた。岩本・八木 (2010) によれば「家系図はいまや、誰もが、簡

4) Nash (2008) はこうしたアイデンティティの在り方を「帰属の複合性 (multiplicity of attachments)」(75) と呼んでいる。

単に、自分の力で作れ」(4)るとされ、その要因について「パソコンやインターネットなどの IT の普及が、この家系図ブームに一役買っているのは間違いない」(116)という。岩本は家系図作成ソフト『ルーツ 2006』の、八木は家系図サイト『ネット de 家系図』の製作責任者であった。このように日本における先祖調査の在り方も時とともに変わりつつあり、系図学的想像力も変容していく可能性がある。

以下ではこうした動向を踏まえつつ、日本の先祖調査に関するいくつかの問題を取り上げる。Ⅲ章では民俗学者である柳田國男の『先祖の話』と赤松啓介の『差別の民俗学』を対象に、先祖調査をめぐる過去の議論の一端を見てみたい。Ⅳ章では 1980 年代以前のテキストを利用しつつ先祖調査をめぐる多義性を確認する。Ⅴ章では、主に 2000 年代以降の日本で確認される広範な先祖調査の実践について整理する。

3. 家意識と先祖調査

今日の先祖調査は必ずしも強固な家意識とは結びついていない可能性がある。しかし以前であれば家を意識する局面であればこそ先祖調査が実施され、先祖調査をおこなうことで家意識はさらに強化されたのではなかったか。実際には柳田は必ずしもそのように考えなかったし、赤松はそうのように考えればこそ先祖調査に批判的であった。

柳田は『先祖の話』(柳田 2012 [初出 1946])の冒頭で 2 つの先祖観について触れている。その 1 つは、先祖とは「自分たちの家で祭るのでなければ、どこも他に祭る者のない人の霊」(3-4)である。いま 1 つは、家系図上にその名が書き記されている、つまり「文字の面」(3)で理解される個々の先祖である⁵⁾。そして、後者のような文字化された多数の先祖たちから構成される「はなはだ詳しい系図」(4)の例が確認されるとしても、日本では前者の方が一般的だとされた。たとえば柳田家の例では「本家の先祖が判っていたとしても、これを祭ろうとはしなかった」(10)。分家にとって大切な先祖とは、分家を 1 つの「家」として作り出した始祖およびその子孫たちだからである。そして「われわれの多くの先祖は、名を覚えていたところでお無名であり、またたいていは一代置きに、同じ通称で通っていて、家の者でさえよく間違える」(74)。複数の先祖は一定期間を過ぎると『御先祖さま』または『みたま様』(祖霊)という 1 つの尊い『霊体』に融け込んでしま(75)い、個々の区別を失っていく。さらに先祖の霊は「外来」仏教の教えのようにあの世へ行ってしまうことで無縁になる訳ではなく、国土空間にいつまでもあって現世の「家」やその構成員を見守っているとされる。柳田は、それぞれの家に関連する集合的な霊を代々祭っていくことが日本における「先祖教」(225)だとした。つまり柳田は、先祖調査によって明らかになる個々の先祖ではなく、曖昧な集合的表象としての先祖たちを家と結びつけて論じたのである。

これに対し柳田民俗学や常民概念の批判者として知られる赤松は、『差別の民俗学』(赤松 2005)において「他家の先祖調査」とでもいうべき実践に触れている。名家でなくとも「結婚となれば三代、五代前まで調べまわし、それがすめば親類、縁者の端まで探って歩く。いまは昔に比べるとだ

5) 民俗学や社会学における先祖観については鳥越(1985)などを参照のこと。

いぶん軽くなったといわれるが、かえって強くなった部分も多い」(47-48)。配偶者となり得る相手の出自を問うために、その者の家系が徹底して調べられてきたのだという。日本では部落差別を含め「家」をめぐる差別構造が根付いており、それぞれの家系にどのような人々が含まれてきたかが明確に意識されてきたことになる。この場合は各家を構成する先祖個人が問われるため、柳田の言う「文字の面」に近い先祖観となる。

さらに赤松(2005)は1982年に記した「家柄願望と差別意識」という文章で「最近の系図探しブーム」(48)について言及している。この時期の日本では家紋や姓氏などに関する出版が相次ぎ、歴史学界の諸雑誌の読書欄では先祖調査に関する投稿が多かったという。赤松はこのブームの直接的理由として第一に結婚における家系・家柄の誇示を挙げる。さらにこのブームは農村ではなく都市が中心となる。「地方の村落共同体の規制を脱して一旗あげるべく都市へ出た庶民たちが、金や地位もできてみると、かつて捨てたはずの『家柄』がほしくな」(49)った。こうした「系図ブームそのものは笑ってすましてよいが、その底にあるどうしようもない日本人の差別意識と、その深さ、その広さは考えざるをえない」(50)。赤松は別の文章において家系を「不可変因子として信仰する限り、われわれに解放はない」(230)とも記している。家意識や家柄を固定化してしまうイデオロギー装置としての先祖調査は、実際には「笑ってすましてよい」実践ではないはずである。先祖調査に内在する排他性にはつねに留意する必要がある。

柳田にとって先祖調査は議論の主題となる事象ではなく、赤松は差別と結びつく家意識を助長するものとして先祖調査に批判的であった。言い換えれば、先祖調査は、柳田の思いとは異なるかたちで、また赤松の意識に反するかたちで、広範に実践されてきたことになる。

あくまでも2人の例を見ただけではあるが、連綿と実施されてきたはずの一般の人々の先祖調査は周知的な事象として、あるいは批判すべき対象として扱われていた。そのためであろうか、民俗学を含む日本の社会科学界では墓や過去帳は調べられても、先祖調査に関する研究はほとんどなされてこなかった。藤原(2008)はその数少ない例外となる。新潟県から挙家離村した農家の家長が作成した系図を手がかりに「近年の系図ブーム」(28)について考えようとした同稿では、現在の先祖調査は「従来の死者忘却的で没個性的な先祖観とは違う」(51)とされ、柳田の先祖観とは異なる側面が指摘される。しかし藤原は「家」ないし家意識それ自体の詳細や変容について考察しておらず、対象として取り上げた事例を家意識と直接結びつけて理解しているように思われる。その内容が誤っている訳ではないとしても、同稿で取り上げられた事例が一例だけであることもあって「近年の系図ブーム」の解明には行き着いていない。

たとえばNash(2008)によれば、先祖調査の目的は自身や家族をめぐるアイデンティティの強化を目的とするものばかりではない。日本でも「ラディカル・先進的」なものも含めて多様な実践がなされてきたであろうし、その在り方は時とともに変化してきたはずである。そこでまず、次章において1980年代までの先祖調査の動向を概観する。もとより文献渉猟は完全ではないが、およその傾向は理解されよう。

4. 日本における先祖調査の変遷

4.1 専門家の系図学から一般人の先祖調査へ

専門家による系図学は各分野の歴史を補完する補助学とみなされてきた。武士らはよい家柄、よい地位を得ようとしたため、系図や系譜には後世になって加筆や偽作されたものが多く、その信憑性がしばしば問題視される。そのため、文献史料の信頼性を重視する研究者が系図や先祖調査一般について強い関心を示すことは必ずしも多くなかったのである。そうした中、3万あまりの姓氏を網羅した太田亮の『姓氏家系辞書』が1920年に出版された。先祖調査には戸籍・墓石・過去帳のほか、姓氏・家紋・地名なども重視される。姓氏は基礎的な意味を有するのである。太田は同書の刊行を機に翌1921年には系譜学会を創設し、会誌『系譜と伝記』を発行して研究成果の普及に努めた（丸山1983：17）⁶⁾。これらに対する一般の人々の反響は大きかった。太田は「系図家系に関して、今までどんなに澤山な質問や調査の依頼を受けたか知れぬ。最初の内は多少余裕もあつたので、指導を與へる程度の返事を出して居たが、其の数が余りに多いので、ぢきにそんな事をして居られなくなつた」と、後の著書『家系系図の合理的研究法』の中で回想している（太田1930：1）。太田は系図学の専門家でありながら、その成果が一般の人々の先祖調査に役立つことを理解していたのである。1934年から36年にかけて3巻構成で刊行された『姓氏家系大辞典』は『姓氏家系辞書』に新たな知見が加えられたものであった。こうした研究は後に近藤（1989～90）によって『系図研究の基礎知識』としてまとめられていく。

なお、太田が活躍していたのと同時期の1926年には沼田頼舗の『日本紋章学』も出版され、その後も頻繁に利用されていく。

太田の『姓氏家系大辞典』は戦後の1963年に復刻版が出版され、その後も「この辞典はルーツ調査者にとって宝石の山である」（岸本2001：40）と賞されている。戦後でもこの分野の第一人者であった太田は、1967年に一般向けのテキストとして『家系系図の入門』を出版した（太田1967）。太田は「今日系図は次のようないろいろな目的から研究されている」（17）とし、5つの目的を挙げている。すなわち、①史学上からの必要、②祖先崇拝という信念、③名誉心、④医学上からの主張、⑤物好きから、であるという。このうち②に関しては、先祖個人が明確になれば「祖先崇拝という美德が削減されはしまいかと憂慮して、ぼんやりとそのままにしておく方がよいという人もある」（18）としながらも、「父母の名を記憶するのと同じように、先祖代々の名を知っておくことも礼儀」（同上）だと主張する。これは柳田の先祖観とは大きく異なる。また⑤の「物好きから」という目的が明記されていることは注目に値する。こうした一般の人々による趣味としての先祖調査は、続く1970年代に大きく展開していく。

4.2 1970～80年代における先祖調査ブーム

1976年にはヘイリーの『ルーツ』がアメリカ合衆国において出版されているが、日本で訳書が出版されたのは翌77年の秋である。日本では、この時期までには先祖調査に関する組織がいくつ

6) 同誌はのちに『国史と伝記』へと改称されている。なお、基本的に氏・姓、苗字の研究は主に古代や中世の研究者らからのアプローチが多い（たとえば豊田 1978；坂田 2006）。

か設立され、関連文献も増加しつつあった。

1975年には日本家系図学会が設立され⁷⁾、会誌を発行して会員間での情報交換がなされるようになっていた。朝日新聞（1977年6月19日）によれば1976年には日本家系協会が営利事業として先祖調査を始めており、この事例を含めて「家系図づくり 静かなブーム」が見出されるとされた。同協会による「家系図づくりにかかる費用は、三十五万円プラス宿泊費、旅費などの実費。だから注文主は中小企業経営者、医師、自営業者など経済的にゆとりのある人がほとんど。『先祖の供養をしたい』『子孫に家系図を残しておきたい』など、ルーツ探しへの動機を話している」。1977年6月には銀座松屋デパートに「家系図コーナー」が開設された。これらは商品化された先祖調査の例となる。他方で1976年初版の『家系探求入門』（吉田 1976）では「大切なのは家系そのものではなく、それを探る過程にある」（4）とされ、先祖調査を趣味として自ら実施することが勧められている。

歴史学者の高橋（1977）の論考「衣食足って“先祖学”流行す」では『ルーツ』に言及しつつ、それによる世界的な先祖調査ブームとは一線を画するものとして日本の動向を理解しようと試みる。「人間が一個の員数として、部分品でしかなくなっているような人間喪失状況の中で、……人としてのプライドのよりどころを求める歴史学習」としての「ウチの英雄の再発見」（265）という意味で、先祖調査が流行を見せるようになったのだという。すでに見てきたように、この時期までには様々な目的をもって先祖調査が実施されていたことは明らかであり、高橋の理解はその一部を強調したものに過ぎない。ただしアイデンティティの揺らぎに対する反作用としての先祖調査という説明は、豊田（1978）の『家系』にも通じるものである。豊田は家意識の揺らぎについて明記する。「近時、核家族の進展に伴い、伝統的な家族制度の動揺がはげしくなって来ているが、その半面家系や苗字の由来を探って、その伝統を究明して行こうという機運もさかんになっている」（2）。そしてこの時期には「入門書が沢山出てきておるし、またお蔭を蒙った」（3）という。

1980年代前半でも関連文献が発行されていた。日本系譜出版会編（1982）の『系図のつくり方』によれば、先祖調査をおこなっていた人々に実施理由を尋ねた結果、①先祖の供養をしたい、②歴史上の人物の子孫だということががはっきりしているが、途中二、三代不明なところがあるので、それを明らかにしたい、③“名家名族意識”はないが、とにかく先祖はどんな人だったのか探りたい、という3つの目的に要約されるという。このうちもっとも多いケースは③であり、同書は名もなき人々の「庶民史」に資する手引書を目指すものだとされた。あるいは丸山（1983）の『家系のしらべ方』によれば、「先祖の生き方を振り返って自分を見直すことが家系研究の大きな目的である」（3）。先祖調査とは自己を再確認するための一手段とみなされている。

以上では1980年代までの日本における先祖調査の動向をごく簡単に概観した。すでに戦前から太田を中心とした系図学の専門家によって先祖調査者向けの情報提供が進められてきた。その太田は1960年代に「物好きから」先祖調査する一般の人々について記している。続く1970年代以降では多数の関連文献の刊行とあいまって「ブーム」と言い得る状況が見受けられ、そのブームには実に多様な意味づけや解釈が与えられていた。家意識と比較的密接に関連するであろう「先祖の供

7) 日本家系図学会 <http://www.geocities.jp/kakenkyou>（2013年12月アクセス）。なお1980年には家系研究協議会が設立されている。

養」の一方で、より趣味的な観点から先祖調査がなされることも珍しくなかったのである。調査者の自己を確認する手段だと見なされることもあった。「最近の系図探しブーム」に言及した赤松の「家柄願望と差別意識」は本節で扱ってきた諸文献と同時期に発行されている。先祖調査が多義的な実践だとすれば、家意識をめぐる赤松の議論はいささか一面的だということになる。

日本では『ルーツ』の出版と同時期に、しかもそれとは一線を画するかたちで先祖調査が静かなブームを向かえていた。ただし『ルーツ』やヘイリーの来日（1977年）がまったく影響しなかった訳ではないであろう（山口2013）。日本では『ルーツ』を受容する素地がすでにあり、その素地が『ルーツ』によって多少なりとも強化されたというのが適当な理解ではなからうか。

4.3 先祖と故地をめぐる旅

赤松（2005）は出郷した人々の先祖調査について1980年代に触れた。同時期には、出郷者が故郷を確認するための施設という意味も含めて博物館や民俗資料館の整備が各地で進められていた（朝日新聞、1977年7月28日夕刊）。故郷意識の高まりと先祖調査ブームとは相互に関連する側面があり、各地の自治体もそうした動向に影響されている。たとえば自治体の名称と同じ苗字の人々を優待し、個人レベルの旅行を地元の経済発展に結び付けようという動きが1980年代以降にみられる。1984年10月には宮崎県小林市が全国の「小林」姓の人々3000人に対して招待状を送り、同市内の観光地見学や夕食会を開催した（朝日新聞、1984年10月22日）。その後も石川県穴水町（同2002年7月21日）、和歌山県新宮市（同2004年10月17日）などで同種のイベントが確認される。こうした擬似的な同姓集団のイベントに継続性があるのか、そもそも何を意味するのかといった点は現時点では明らかではないが、広い意味での制度化された先祖ツーリズムの例にはなる。

これらのイベントとは別に、自らの苗字への関心という単純な動機から、その苗字と同じ地名をめぐる旅をおこなう人々は以前からいた。柳田（1969）によれば、「地方の歴史を調べて見ようとする人の為に、家名分布の実状がどれだけ迄の参考になるか……。地方の歴史の第一要項、即ち今住む人々と土地との関係は、大よそいつの頃如何なる様式を以て結ばれたかは、たゞ此方向からばかり、少しづつ、尋ねて行くことができるので、又それが答へられぬやうならば、大きな郡誌も民衆には無意味である」（300）。苗字と土地は深く結びついており、それを検証することが地域史へと繋がっていくというのである。そしてより個人的な関心から、自らの苗字と地名との関係をめぐって故地や関連する場所を訪れる人々も珍しくない。丹羽（1981）は「祖先発祥の苗字地とか、同名の地名などは、一度は訪ねてみるものだ」とし、「姓氏や祖先を調べるために、旅に出るとは、ありきたりの観光旅行等と違ってどれほど有意義かわからぬ」（164）と言っている。

趣味という点に注目すれば、先祖ツーリズムはその中心的な実践の1つとなる。丸山（1983）によれば1980年代にはルーツを訪ねる旅行者が多くみられるようになってきた（26）。「どこか遠くに旅したい人は、人混みで殺到する観光地をさけて、家族づれで先祖の暮らしていた土地へ旅行するプランを立ててみたらいかがですか。普段は変わりばえのしない山川草木が何かを語りかけてくれるはずです。あなたと同じ苗字をもつ中世山城の遺趾へ行くのもよいでしょう」（20）。

日本国内であっても北海道への移住者を含む各地への出郷者やその子孫、さらには海外への移住者の子孫たちによる先祖調査を想起すれば、そこでは先祖ツーリズムの要素がさらに強く含まれる

ことになる。それらの動きがいつからあるのかも今後確認する必要があるが、1970～80年代以降に広まったものであろう。

5. 21世紀の先祖調査

5.1 選択される先祖

1990年代後半以降の先祖調査ではパーソナルな趣きがさらに強まっているように思われる。平岡（1999）の「過去への自分探しルーツヒーリング」というエッセーによれば、「ほんの少し前の歴史を、知らない日本人が増えた。祖父母から語られることもないし、歴史でも教えられない。過去の空白を埋めたい。それが家系図づくりの静かなブームを生み出しているようだ」（35）。特殊な例ではあるが、NHKの番組である『ファミリーヒストリー』で取り上げられ、同名の書籍にまとめられた7人の芸能人⁸⁾について見てみると、その多くでは祖父母よりも以前の先祖にまで遡って家族史が語られることはなかった（NHK「ファミリーヒストリー」制作班編 2011）。その後の番組で取り上げられた芸能人の例では今少し長い家系に言及されたこともあったが、基本的には近親者に重点が置かれていた。自分史の延長であるかのような「ほんの少し前」の近親者をめぐる家族史が重視される傾向が見受けられる。

実際に立花隆の『自分史の書き方』によれば、「自分という人間のメイキング・オブを語ろうと思うなら、有名な家系であろうとなかろうと、先祖のことに多少とも言及すべきである」（立花 2013：58-59）。これはまさに自己を起点とした家系・家族の描き方である。立花はまた、自分史を描く際には各時期における「人間関係クラスターマップ」を作成しておくことも推奨する。言うまでもなくこのマップもまた調査者自身を中心に据えた人間関係を意味する。

こうした自己を中心とするパーソナルな関係が重視される一方で、新たなテクノロジーを利用した、かつてない規模の系図も作成可能となっていることも注目値する。岩本・八木（2010）が紹介している次の事例は興味深い。それは自身と妻の父系・母系双方の計600人の先祖・親族の調査をおこない、『ルーツ2006』を利用して家系図をまとめたというものであった（8-9）。

このように先祖調査の方法や、調査の結果として生じる家族・家系の姿は多様化している。ただしここで取り上げた2つの動向には相似点もある。近親者だけを対象とする家族史と、600人という多数の親族を対象とした巨大な家系図のいずれについても、調査者自身の関心に従って対象が選ばれている。調査者の実践はもはや固定的な家意識によって規定されておらず、「誰が先祖であったか」ではなく「誰を（重要な）先祖とするか」というように問いが変化している。ここでは先祖は個別に選択される対象である。たとえば丸山（2009）は、先祖調査についてなおも「先祖供養という厳粛な一面もある」と記している一方で「エンターテインメント」でもあると言っている（26）。

岩本監修（2013）では、様々に描き得る家系図のうち、特に次の4種類を挙げている。すなわち、①父方の先祖を連続的に書き連ねていく「父方直系」家系図、②父方のある特定の先祖を起点にその子孫たちを網羅した「父方傍系」家系図、③調査者を起点として父母双方の家系を描いてい

8) ルー大柴、宮川大助、市毛良枝、綾小路さきまろ、マルシア、高橋恵子、ジョン・カビラの7人である（NHK「ファミリーヒストリー」制作班編 2011）。

く「父方母方」家系図、そして④調査者と配偶者双方の家系全体を網羅的に描き出していく「両家」家系図である（32-33）。家系図と一口に言ってもその様相は大きく異なる。このうち、先に触れた600人からなる「両家」家系図の作成は、コンピューター・ソフトがあればこそ可能となったものであった。テクノロジーの発達は先祖の描き方のかつてないかたちに変化させ、先祖調査や系図学的想像力を拡張するのである。

5.2 先祖調査手法の進展と限界

欧米では様々な点で先祖調査の簡便化が進められてきた。たとえばスコットランドでは先祖ツーリズムに資するため、関連情報を一括して扱う統合機関である「ScotlandsPeople」が統計局、紋章院、国立公文書館によって2004年に設立された（喜多・山口2008）。しかし日本では戸籍簿や除籍簿、国勢調査などを取り扱うアーカイブスは設置されていない。これらのデータには個人情報の扱いをめぐる様々な問題があるからだという（森本2010：94-95）。家柄や出身、出生といった個人情報に差別意識を含む身元調査に悪用されてきたことは赤松（1995）が指摘した通りである。

そのため、別の方法による先祖調査の手段も模索され、実践されている。たとえば鍋嶋報効会は佐賀藩が作成した佐賀城下の武家地約1000軒の土地台帳『屋舗御帳控』を翻刻し、出版した（朝日新聞、2012年5月31日）。名古屋博物館もまた尾張徳川家の藩士の個人情報と、その屋敷のあった場所を現在の住宅地図から検索できるDVD「名古屋城下お調べ帳」を作成した（読売新聞、2013年5月25日）。尼崎市立地域研究史料館は尼崎藩の藩士・家臣団についてインターネット上で氏名や家録などを簡単に検索できるデータベース『分限』を一般公開している（朝日新聞、2013年8月31日）。あるいは秋田県公文書館では、『私の先祖は秋田藩の武士だと聞いているのですが…』と、当館には県内外から多くの方が見えます」とされ、同館が発行する『古文書倶楽部』には先祖調査の方法や利用可能な資料類を示した特集号もある⁹⁾。こうした近世城下町研究と結びつく動きは全国で幅広く見受けられる。

古文書の解読が困難である、あるいは時間的余裕のない人々をターゲットとした行政書士による先祖調査の代行ビジネスもある。行政書士の資格をもたない業者が家系図を作成したとして起訴され、家系図は事実証明書類に当たらないとして最高裁判所が逆転無罪とした裁判があった（春日井2011：90）。これを機に家系図作成のビジネスの門戸はさらに広くなるものと思われる。実際にインターネット上には家系図代行業者のホームページが多数存在する。もっとも、その一部は身元調査を行うために先祖調査をおこなうというものであり、赤松の懸念はなおも無効化してはいない。

調査手法の進展に関してはモルモン教会（末日聖徒イエス・キリスト教会）による世界的な動向との関係にも触れておく必要がある。日本の行政機関では入手できない先祖の情報が、同教会が拠点を置くアメリカ合衆国ユタ州のソルトレーク・シティにある家族史図書館（Family History Library）や、同教会の世界各地の支部において入手できることがある。Otterstrom（2008）は同教会が世界中で先祖に関する情報を集めている理由を説明する。モルモン教会では死後に訪れる神の国において拡大家族を再構築することが重視される。神の国に行くためにはモルモン教会の方式に則

9) 秋田県公文書館古文書班『古文書倶楽部』第15～17号（2007年）および第29号（2009年）。

った洗礼を受ける必要があるが、同教会は 1830 年に設立された新宗教団体であるため、その方法で洗礼を受けていない先祖が数多くいる。よって少なくとも 4 代前までの先祖の情報を集め、それを基に先祖たちの儀礼をおこなうのである。潜在的に世界中の人々が信者になり得るとすれば、世界中で先祖の情報を集める必要がある。そして、収集された情報は基本的に一般公開されている。

モルモン教会の調査員は日本にも派遣され、様々な情報が集められている。同教会と関連するかたちで先祖調査に貢献してきたユタ系図協会および同東京支部図書館の活動については増田（2000 a； b）に詳しい（あるいは丹羽・鈴木 2006）。ユタ系図協会東京支部は日本家系図学会の活動をサポートし、日本での先祖調査にも貢献している（岩本・八木 2010： 115）。このように日本における先祖調査においてもグローバルな調査トレンドと結びつく部分がすでにみられるのである。

以上では今日における先祖調査の進展の例をいくつか挙げてきた。実はそのいずれの手法や現象にも限界や問題点がある。たとえば旧藩に関連する諸資料は、多くの場合、武士であった先祖にしかな有効ではない。秋田県公文書館では、「江戸時代の先祖が農民や町人の場合、当館所蔵の資料からお探しいただくのは困難を伴」うとされる¹⁰⁾。また先祖調査ビジネスの発展は、万人にとって容易にアプローチできない部分があることを意味する。モルモン教会の事例が示すのは、日本国内において公的には入手困難な情報があるということである。情報収集が難しければ詳細な家系図の作成は難しくなり、方法上の制限によって近親者の家族史の作成にとどまらざるを得ないケースもあるかもしれない。

5.3 先祖を介したネットワークの拡張とディアスポラの動き

先祖調査においてパーソナルな傾向が強まっていることは確かである。先祖ではなく、自らのライフコースをたどる旅行を「ルーツ旅」と呼ぶ者もいる（相庭 2013）。しかし関心の対象を近親者や自身に限定するのではなく、反対に広げていく動きも見受けられる。同姓の人々から構成される氏族会、あるいは旧藩士会や県人会などの同郷者ネットワークへ参加し、先祖調査の情報を交換することで新たな人間関係を構築する人々がいる。ディアスポラ向けのイベントも見受けられる。以下はその例である。

たとえば藤原鎌足を祭る奈良県桜井市の談山神社では「談山神社崇敬会」を改編して「談（かたらひ）の会」という「藤原氏」のための会組織が 2008 年に設立されている。ここで言う「藤原氏」とは直系の人々だけでなく膨大な数の傍系が含まれるものと思われる。同会が発行する『藤原氏族一覧』¹¹⁾には「藤原」や「加藤」、「佐藤」といった藤原氏に近い苗字を含めて 3452 の苗字が記載されており、そこには本稿の執筆者名である「山口」や「喜多」も確認できる。同会への入会については「藤原氏のみならず、『談の会』へご入会下さい。談山神社とのむすびを深めましょう」とある。入会資格に制約があるか否かなどの詳細は今後の課題である。

ヘイリーの『ルーツ』はマイノリティに対してそれぞれの歴史の描き方があり得ることを教え、日本でも在日コリアンや沖縄の人々などに大きな影響をもたらした。『ルーツ』によって「虐げら

10) 秋田県公文書館古文書班『古文書倶楽部』第 29 号（2009 年）。ただし同館所蔵の「賞之部」や「山林原野 其他原由取調書」といった資料には農民や町人も記されているという。

11) 『藤原氏族一覧－談山神社御祭神藤原鎌足公御裔－』。2010 年 3 月に談山神社にて入手。

れた黒人と沖縄のもつ特殊性に共通の立場を見出す」人々は少なくなかったとされる（社会思想社編 1978：74）。その沖縄県では、もともと旧琉球王朝の士族の子孫たちを中心に家譜（系図）が作成されてきたが、その内容の厳密性を求める動きはますます盛んになっているという。また、そうした動きは「百姓系門中（民間の門中）における系図作りの過熱と無関係ではない」とされ、系図の作成には新たな手法も取り入れられている（武井 2013）。他方で沖縄県では 1990 年からおよそ 5 年おきに「世界のウチナーンチュ大会」が開催されている。沖縄系ディアスポラによる先祖ツーリズムのイベントである。また 2013 年にはロサンゼルスで「第 2 回世界の若者ウチナーンチュ大会」が開催され、大会 2 日目には「ガジュマル・ファミリー・ツリー」と題して参加者全員が自らの家系図を作成し、沖縄出身者としてのルーツをたどった（沖縄タイムス、2013 年 7 月 20 日）。沖縄内外のローカルおよびグローバルな動向が全体としてどのように関連しているのかなど、興味深いテーマが見出されるものと思われる。たとえば 1978 年にはアメリカ合衆国の日系ディアスポラが当時の「ルーツ・ブーム」の影響下で「ハワイ移民資料保存館」を設立した（朝日新聞、1978 年 10 月 27 日夕刊）。沖縄を含む日本各地の「移民県」と海外の間には、先祖調査を介して何らかの結びつきがある可能性があらう。

沖縄系ディアスポラと似た動きは北海道における開拓移民の子孫たちにも見受けられる。丸山（1983）は 1980 年代に次のように記している。「北海道函館に生まれたドサンコ 3 代目の私の場合は、祖父がどこからどんな思いで青函連絡船に乗ったのかを考えたとき家系研究を思い立った次第です。……東北 6 県のほか新潟・富山の北陸路をはじめ徳島や島根などもあり、各地の苗字が見当たります。……現在北海道に在住する方で家系研究に熱心な方が多く、内地の町や村を訪ねたり、文獻的に研究したりしています」（58）。1990 年初出の文獻でも次のように言われている。「移民で築かれた北海道は、……自分が何者なのか、自分のルーツはどこなのか分からない場合が多い。語られる家の歴史は、ほとんどが『道産子』になってからのもの。年を取るにつれて、『歴史』を知りたいという願望は強くなり、関心のない人は皆無、といっても過言ではないだろう」（読売新聞 20 世紀取材班編 2002：84）。こうしたことから、北海道生活文化史研究会（2000）は「北海道 212 市町村のルーツを求めて」と題して、各市町村の基礎を作った人々の概要やその故地についてまとめている。岸本（2001）は『道産子のルーツ事典』を発行し、北海道に多いという 2000 の苗字それぞれの主たる来歴を示した。

繰り返しになるが、日本の社会科学界では先祖調査や関連事象はさして注目を集めてこなかった。以上の様々な事例をさらに明らかにする作業はいずれも今後の課題となる。

6. まとめにかえて

以上では日本における先祖調査の展開に触れてきた。今日では先祖調査を志す人々を対象としたテキストが書店に並んでおり、遺産相続を視野に入れて家系図をまとめる項目を設けたエンディングノートも用意されている。すでに「家」や家意識は確実なものとは言えなくなり、趣味であれ実用性を考えてであれ、家族や家系は文字化して理解されることが珍しくなくなった。また、2000 年代以降でも先祖ツーリズムは存続しており、歴史ブームを背景に家系図を持ち歩いて先祖ゆかり

の地などを尋ね歩く「カケイザー」の存在が確認されるという（春日井 2011：90）。

先祖をめぐる諸実践には、以上では取り上げなかった事例もまだあるはずである。たとえば私小説はもともと自分史や家族史との親和性が高いと思われるが、昨今ではルーツを取り扱った小説やエッセイが多数発表され、文学賞を受賞している¹²⁾。こうした動向をさらに広く確認する作業も今後の課題となろう。

ところで、先祖調査で確認できる先祖の情報にはつねに限りがある。そして、文字化できない複数の先祖の存在は、家意識に還元される可能性がある。太田（1930）によれば、詳細なデータが得られない状況下での先祖調査は「家史」に帰結するという。「我々は少し古く遡ると、一々祖先の名称や、其の事績を明らかにする事が不可能であるけれど、過去帳、位牌、石塔、並びに其の他の文献、及び世襲的通称、実名の通字、家紋、苗字、屋号、伝説、その他発祥地の沿革、檀那寺、氏神等の調査等によつて、我が家が如何なる沿革を辿つて来たかを知る事が出来るのである。つまり系図をつくると云ふ事は困難であるが、家史と云ふものは反つて容易に出来ると思ふ」（3）。これは柳田が考えたような集合的表象として一元化された先祖の在り方とは異なるが、「文字の面」で個別に理解される先祖の在り方とも異なっている。こうした「家」それ自体を対象とするような先祖調査は、当然ながら家意識と密接に結びつくであろう。しかしもしそうであるならば、反対に、昨今のハイテク化された精密かつ広範な系図表現や、近親者に限定されたパーソナルかつ詳細な家族史は、かつてと同じ意味での家意識とは必ずしも結びつかないことになるのではなからうか。もちろん家意識を相対化するような先祖調査がなされたとしても、それが家意識を消し去ってしまうことはないかもしれない。「物語の復権」（片桐 2003：188）の一部をなすことで、先祖調査が「家」をめぐる物語を強化したり代替していく可能性もある。いずれにせよ、赤松が指摘した先祖調査に内在する排他性に留意しつつ、その広範な実践をめぐる情報収集がさらになされても良いはずである。

2008年には『先祖の話』の「新訂」が発行された（柳田 2012）。同書は家意識を含む「わが国固有信仰」をまとめたバイブルと見なされたのであり、「新訂」の推薦者には中曽根康弘など保守系の人々が散見される。他方で同書は2012年の日本民俗学会第866回談話会でも取り上げられた。そこにおいて菊池（2013）は次のように問うている。「今日、『同族』はおろか『核家族』さえ『崩壊』——といって支障があれば『変容』——の一途をたどる最中」において、「『先祖』をめぐる表象と実践に、どのような選択肢があり得るか」。菊池自身は「いま、私たち自身の『先祖の話』を必要としている」としつつ、そのための方法として「まず、いくつかの『先祖の話』との対峙が必要」と結論する（63）。『先祖の話』が「わが国固有信仰」のバイブルとして読まれるような排他的な志向を避けるには、同書をめぐる多様な解釈を知っておくことは有益であろう。しかし『先祖の話』が一般の人々（常民？）の先祖観や家意識を問うものであったとすれば、その相対化は、一般の人々の先祖調査などの実践や系図学的想像力それ自体の確認によってこそなされるべきではなからうか。今日の先祖調査には、あるいは先祖観一般には、『先祖の話』の内容とは大きく異なる側

12) たとえば角田光代（2010）『ツリーハウス』、鈴木遥（2011）『ミドリさんのカラクリ屋敷』、高橋秀実（2011）『ご先祖様はどちら様』など。

面が確実にあるはずだからである。

付記

本稿の作成には関西学院大学先端社会研究所の研究費を利用した。

参考文献

- 相庭美樹, 村田和子監修, 2013「思い出をたどる, 私だけの小さな旅」いきいき 203: 20-23.
- 赤松啓介, 2005『差別の民俗学』筑摩書房(ちくま学芸文庫).
- 飯島利一, 2009「ご先祖様に会いに行く! - 飯島氏は, どのような歴史をたどってきたのか? -」歴史と教育 137: 24-27.
- 岩本卓也・八木大造, 2010『いまこそ家系図を作ろう』樞出版社.
- 岩本卓也監修, 2013『なぜいま家系図を作るべきなのか?』樞出版社.
- 上野千鶴子, 1994『近代家族の成立と終焉』岩波書店.
- 太田 亮, 1930『家系系図の合理的研究法』立命館大学出版会.
- 太田 亮, 1941『姓氏の家系』創元社.
- 太田 亮, 1967『家系系図の入門』人物往来社.
- 春日井章司, 2011「動き出した先祖探しビジネス-『究極の自分史』は上質なミステリー-」エコノミスト 89-15: 89-91.
- 片桐雅隆, 2003『過去と記憶の社会学-自己論からの展開-』世界思想社.
- 岸本良信, 2001『道産子のルーツ事典-先祖を正確に調べる方法-』中西出版.
- 菊池 暁, 2013「主な登場人物2-京大文化史学派の『先祖の話』受容-」日本民俗学 276, 52-68.
- 喜多祐子・山口 覚, 2008「現代スコットランドの先祖調査ブーム-調査手法の発展と系図学的想像力-」人文地理 60-1: 21-40.
- コーエン, ロビン, 2012『新版 グローバル・ディアスポラ』明石書店.
- 近藤安太郎, 1989-90『系図研究の基礎知識 第1-4巻』近藤出版社.
- 坂田 聡, 2006『苗字と名前の歴史』吉川弘文館.
- 社会思想社編, 1978『『ルーツ』と私-Alex Haley in Japan-』社会思想社.
- 高橋富雄, 1977「衣食足って“先祖学”流行す-ルーツ史学の国民哲学-」中央公論 92-10: 256-265.
- 武井基晃, 2013「系図と子孫-琉球王府士族の家譜の今日における意義-」日本民俗学 275: 14-34.
- 立花 隆, 2013『自分史の書き方』講談社.
- 豊田 武, 1978『家系』近藤出版社.
- 鳥越皓之, 1985『家と村の社会学』世界思想社.
- 日本系譜出版会編, 1982『系図のつくり方』琵琶書房.
- 丹羽基二, 1981『姓氏の語源』角川書店.
- 丹羽基二, 2001『姓氏, 家系, 家紋の調べ方』新人物往来社.
- 丹羽基二・鈴木隆祐, 2006『自分のルーツを探す』光文社新書.
- 平岡妙子, 1999「過去への自分探しルーツヒーリング-家系図づくりが静かなブームになっている-」AERA 12-49(通号619): 34-37.
- 藤原 洋, 2008「挙家離村と家継承の問題-系図に刻まれる先祖代々の土地の暮らし-」日本民俗学 253: 27-55.
- 北海道生活文化史研究会, 2000『ふるさと探求-北海道212市町村のルーツを求めて-(上・下)』アド真美.
- 増田節雄, 2000a「家族歴史記録の収集および活用-インターネット上での情報共有化とその展望-」レコード・マネジメント 41: 38-42.

- 増田節雄, 2000 b 「Genealogical Society of Utah－ユタ系図協会の活動紹介－」月刊 IM 39-8: 10-14.
- 町口 充, 1989 『家系図をつくる－菩提寺の過去帳, 墓碑銘は, 何を語るか－』冬樹社.
- 丸山浩一, 1983 『家系のしらべ方－わが家の先祖研究から系図・系譜作成まで－』金園社.
- 丸山 学, 2009 『「家系図」を作って先祖を 1000 年たどる技術』同文館出版.
- 森本祥子, 2010 「日本アーカイブズで家系調査は可能か－課題整理と可能性の模索－」海港都市研究 5: 89-97.
- 柳田國男, 1969 「家名小考」, 同『定本柳田國男集 第 15 卷』筑摩書房: 291-307.
- 柳田國男, 2012 『新訂 先祖の話 (第 2 版)』石文社.
- 矢野敬一, 2006 『慰霊・追悼・顕彰の近代』吉川弘文館.
- 山口 覚, 2013 「ルーツとエスニシティ－アレックス・ヘイリーと系図学的想像力－」地理科学 68-1: 1-24.
- 吉田大洋, 1976 『家系探求入門－先祖を調べるガイドブック－』日本ジャーナルプレス新社.
- 吉原和男・鈴木正崇・末成道男編, 2000 『〈血縁〉の再構築－東アジアにおける父系出自と同姓結合－』風響社.
- 読売新聞 20 世紀取材班編, 2002 『都市物語』中央公論新社.
- NHK 「ファミリーヒストリー」制作班編, 2011 『ファミリーヒストリー－祖父と祖母, 父と母, 家族の絆の物語－』新人物往来社.
- Basu, P., 2007, *Highland homecoming: genealogy and heritage tourism in the Scottish diaspora*, Routledge.
- Bueltmann, T., 2012, 'Gentleman, I am going to the Old Country': Scottish roots-tourists in the late nineteenth and early twentieth centuries, Varricchio, Mario ed. *Back to Caledonia: Scottish homecomings from the seventeenth century to the present*, Birlinn, 150-167.
- Gates, H. L., Jr., 2009, *In search of our roots: how 19 extraordinary African Americans reclaimed past*, Crown Publishers.
- Kennett, D., 2011, *DNA and social networking: a guide to genealogy in the twenty-first century*, The History Press.
- Nash, C., 2008, *Of Irish descent: origin stories, genealogy and the politics of belonging*, Syracuse University Press.
- Newland, K., 2011, Diaspora tourism, *Diaspora matters*, 1-19.
- Otterstrom, S. M., 2008, Genealogy as religious ritual: the doctrine and practice of family history in the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints, Timothy, D. J. and Guelke, J. K., eds, *Geography and genealogy: locating personal pasts*, Ashgate, 137-151.
- Waddell, D., 2004, *Who do you think you are?: the essential guide to tracing your family history*, BBC Books.

Creating Bonds with Ancestors :
Developments of Popular Genealogy in Japan

YAMAGUCHI, Satoshi
(Kwansei Gakuin University)

KITA, Yuko
(Kacho Junior College, part-time lecturer)

Abstract

This paper examines the growth of popular genealogical research in Japan, ‘the quiet boom’ in researching ancestral family lineages by lay members of the public. Such popular genealogy is not unique to Japan and has become popular on a global-scale by the publication of Alex Haley’s *Roots* in 1976. Since around 2000, a number of recent factors have influenced the growth of popular genealogy in the Japanese context. One of the important factors in the rise of popular genealogy in Japan was the ‘traditional house consciousness’. Under this trend, some genealogists have a strong interest in knowing and passing on the family history of closer relatives. At the same time, the creation of the huge family tree has been strongly encouraged and aided by rapid developments in technology, such as a computer software *Roots 2006*. The visiting ancestors’ place of origins has developed into a form of ancestral (or “roots”) tourism. These trends show that the recent popular genealogy in Japan is practiced as hobbies.

Key words : popular genealogy, family history, ancestral/roots tourism